ルポ◉

「移民ネグレクト」に終止符を 泥縄式の「労働開国」に懸念も

農漁業や製造業、建設業など、担い手不足の労働現場で
いまや欠かせぬ戦力となっている外国人労働者。
私たちの便利な暮らしを支える隣人の姿を、見えないものとして扱う
「移民ネグレクト」こそ日本の国策ではないか――。
「早稲田ジャーナリズム大賞」受賞の、西日本新聞取材班キャップによる現場レポート。

西日本新聞
「新 移民時代」取材班キャップ
坂本信博

暮らしの隣に「移民」一四六万人という現実

きっかけは二〇一六年九月、社会部で同僚記者が口にした何気ない話題だった。「福岡市内の一角に、ネパール人の若者たちが身を寄せ合って暮らす『国際通り』があるらしい」

確かに、福岡市内で中国語や韓国語とは異なるアジアの言葉を耳にしたり、深夜の居酒屋やコンビニエンスストアで働く褐色の肌の人びと見掛けたりすることが、ここ数年で急に増えた。法務省入国管理局に聞くと、日本で暮らすネパール人の増加率は福岡県が全国でも突出して高く、過去一〇年間で一九倍に激増していた。「おもしろそうだね」。社会部内に取材班を結成した。

ネパール人の若者からアルバイト先への送迎バスの時刻表を入手し、乗り場であるJR駅前で張り込みを続けた。中国系とは違う肌の色をしたアジア系の外国人の方がぞろぞろと現れ、バスに乗り込んでいった。尾行を始めた。

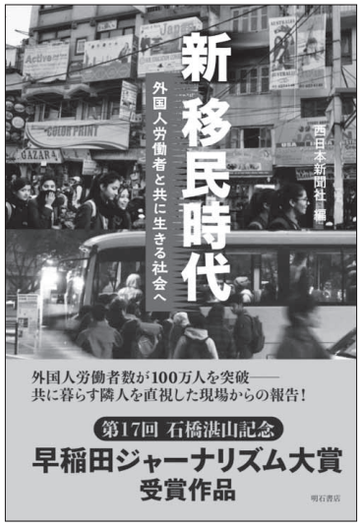
一台のバスがたどり着いたのは、福岡市郊外にある運送会社の仕分けセンター。働く人の九割がネパール人留学生で、バイトリーダーも任されていた。

別のバスを追うと、コンビニ弁当の工場に着いた。内部にはベトナム語とネパール語で注意書きがあり、労働者のうち九割が外国人。うち八割がベトナム人、残り二割がネパール人だった。アルバイトを掛け持ちして、月二五万円稼ぐ若者もいた。昼間はコンビニのレジ、深夜はその弁当工場でアルバイト。夜に自分が作った冷やしうどんを昼間に売っているという、冗談のような事実も見聞きした。

なぜ尾行や内部資料を入手するような取材をしたか。運送会社もホテルもコンビニも、多数の留学生が働いているにもかかわらず、取材を断ってきたからだ。多くの留学生が入管難民法に基づく留学生の就労制限（原則週二八時間以内）を破って働いているのを隠すためだ。一方で、留学生たちはそれぞれの職場で欠かせぬ戦力になっていた。

日本で暮らす外国人の実像や、彼らなしには成り立たない日本社会の現実をアジアの玄関口・九州から見つめ、共生の道を探ろう―。西日本新聞は二〇一六年一二月からキャンペーン報道「新 移民時代」を始めた。

朝刊の一面トップを飾った最初の記事には「暮らしの隣『移民』一〇〇万人」という大きな見出しを付けた。この年、日本国内の外国人労働者が初めて一〇〇万人を突破。その後一年で約二〇万人のペースで増え続け、一七年一〇月には一二八万人、一八年一〇月には一四六万人を記録した。その二割は留学生だ。発展途上国から来た彼らの多くは、アルバイトなしでは学費や生活費が賄えない。就労制限を守れば生活が困窮し、破れば摘発対象となる。一方で、深夜の食品工場や運送会社の配送センター、コンビニや居酒屋など、日本の若者が敬遠する人手不足の職場で、時に不法就労で働く留学生たちが貴重な労働力となっている。二四時間営業のコンビニでいつでも弁当が買え、オンラインショッピングですぐに商品が届く便利な暮らし。外国人受け入れに反対の人びとも含め、多くの日本人が恩恵を受けていると分かった。



『新 移民時代』の連載記事をまとめた書籍（明石書店）

さかもと・のぶひろ
一九七二年生まれ。マレーシアの邦字紙記者、商社勤務を経て一九九九年に西日本新聞社入社。主に社会部で医療、教育、調査報道などを担当。二〇一七年に「新 移民時代」取材班キャップとして石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞受賞。社会部デスク兼遊軍キャップを経て、現在は西日本新聞メディアラボ クロスメディア報道部シニアマネージャー。